

東京バッハ合唱団 月報

[第 609 号] 2013 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 <http://bachchor-tokyo.jp/>
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail(変更): office@bachchor-tokyo.jp bachchor@nol.com (2013. 02. 14 閉鎖)

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 609

March 2013

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

カトリック百合丘教会で「コラールと合唱、福音書朗読による《マタイ受難曲》」 四旬節黙想会での上演に感謝

鈴木 喜久 (百合丘教会員)

東京バッハ合唱団のみなさま

先日は遠いところを、合唱団の方々たくさん教会に来てくださり、素晴らしい合唱を聞かせてくださり、ありがとうございました。

もっと多くの方が残るかと思いましたが、やや少なく、ちょっと残念でした。でも残られた方たちは熱心な方たちでしたので、たいへん喜ばれました。ある方が言っていました、「事前にもっとバッハ合唱団をよく紹介してくれたら良かったのに。これほどの合唱団とは思わなかった。惜しいことをした」と。

残られた方たちは、よく歌っておりました。これも指揮者の大村様が、[コラールの復唱の際に]聴衆のほうを向いて指揮して下さったおかげです。

毎年、四旬節になると読みはじめられるマタイ福音書の受難物語ですが、今回は素晴らしい歌声のなかで聴き、自らも歌い、参加なさった方々はいつもとは違う、主のご受難を黙想されたことでしょうか。涙をながしたと言っている人もいました。そして、帰りぎわに「よい黙想会でした。ありがとうございました」と多くの人が私に挨拶されて帰っていかれました。

昨年の、荻窪教会 [《マタイ受難曲》入門の入門。合唱と福音書朗読によるコンサート。2012 年 5 月 19 日] でいただいた感動が大きく広がって、みなさまに伝わっていきました。バッハの偉大さ、バッハ合唱団の素晴らしさでしょう。感謝申し上げます。

東京バッハ合唱団の 50 周年と聞き、大村様がバッハ一筋に努力を積み重ねてこられたことに、改めて敬意を表します。

50 年、半世紀、長い年月ですね。その間いろいろなことがあったでしょうが、一つのことを追求してこられたということは、素晴らしいことです。その努力が実って、良い、立派な合唱団になりましたね。

いつも公演のときは、客席の方からだけ見ておりましたが、今回、舞台裏といいますか、お招きする責任者の立場で、練習風景や昼食のときの様子をうかがい、みなさまの素顔に接した思いで感心しました。和やかで明るい雰囲気です。やはり、一つの目標に向かって、毎週あつまって努力されているから、成ることでしょうね。いい仲間だなと感心いたしました。



■ 四旬節黙想会での《マタイ受難曲》抜粋演奏。カトリック百合丘教会、2013 年 2 月 24 日。写真提供：松尾茂春氏 (団員)

ここまで一つでないと、いい合唱は生まれないのでしょうね。

今回は本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

.....

お便りをお寄せくださった鈴木喜久さまは、この企画を中心になって進めてくださった百合丘教会の重鎮であり、聖書全文を読み通そうという「聖書 100 週間」運動の主導者のお一人です。ご夫人は、2009 年のドイツ演奏旅行にも同行された元団員の鈴木敬子さん。

カトリック百合丘教会での演奏

大村 恵美子 (主宰者)

この企画は、昨年 5 月の荻窪教会での特別演奏会を聴かれたカトリック百合丘教会の方々から、毎年受難節の前に開催されているご自分の教会の黙想会としてもぜひ再演してほしいというご依頼があり、実現されました。わたしたちの合唱団がカトリック教会で演奏するのは、2009 年 8 月のドイツ・フライブルク大聖堂のミサ以降では初めて、初期に板橋カトリック教会で《マニフィカト》を演奏して以来のことで、たいへん意義深く感じられ、喜んでお受けしました。

これは公演ではなく、主催の方々にとっての、四旬節の時期のたいせつな催しということでしたので、月報愛読のみなさまにすらお知らせできずに、ちょっと心残りでしたが、こちらの教会の日曜ミサでは、200 人収容のお御堂がいつも満ち溢れるような活気で、予

告を控えめにしても、当日お入れするのに困難な状況が生じかねないという事情もありました。

当日は、10 時からの通常ミサにひきつづいて、11 時 30 分から 2 部に分けて、《マタイ受難曲》中の全コーラルを、福音書朗読でつなぎながら演奏するというものでした。これらの内容は、冒頭合唱（第 1 曲）と第 1 部終曲合唱（第 29 曲）、休憩をはさんで、第 2 部終りの合唱つき 4 声部レチタティーヴォ（第 67 曲）と終結合唱（第 68 曲）とによって包み込まれ、どのコーラルも、そのつど客席の方々によって復唱されました。福音書（マタイ 27, 28 章の全文）の朗読は、《受難曲》中ではエヴァンゲリスト（福音書記者）が朗唱する地の文の担当と、イエス、ペトロ、ユダ、ピラトなどの登場人物の台詞を語るものとして、合唱団員が分担して進められるというスタイルです。

コーラルは、この作品のなかでも、現在の私たちにいちばん近い心境を表現する会衆歌です。上述のとおり、合唱団員が歌ったあと、つづいてくり返し聴衆も全員で歌いました。ミサのなかでは、カトリックの方々は、つねに聖職者と応答をかさね、祈りになったり、歌になったり、とても活発です。それが《マタイ受難曲》のコーラルの場合にも同じ効果となり、ただ一方的な演奏会の鑑賞者とはちがう、主体的なひと時を過ごされたようで、開催の趣旨にもふさわしかったのではないのでしょうか。

立春は過ぎたものの、寒気はこの日あたりがもっとも厳しく、未知の地域の演奏会場にもかかわらず、吹きすさぶ風を受けながら、リハーサルと当日と、2 回通ってきた団員の勇気も、並々ならないものがありました。ご夫妻とお子様兄妹、全員 4 人で励んでおられた室田ファミリーが、直前のインフルエンザで、参加できなくなったのは残念でしたが、ほかにも、さまざまなお苦勞のなかをやりくりされた、出席と欠席の多くの方々があったことでしょう。

《マタイ受難曲》の定期演奏会は、このたびの 3 月

< 終了報告 >

カトリック百合丘教会
四旬節黙想会のための特別演奏会
《マタイ受難曲》抜粋

日時：2013 年 2 月 24 日（日）11:30 - 13:00
会場：カトリック百合丘教会

指揮：大村恵美子
オルガン：内山亜希
合唱/聖書朗読：東京バツハ合唱団

合唱団出演者（31 名）
S1：出口・川合・荒井・神田・信森・田中・米山・梅沢
S2：小口・小谷・小林
A1：高野・三上・池田 A2：小野・風岡・飯石
T1：大村・川戸・興語 T2：村山・宮城
B1：加藤・千葉・米山・野本 B2：松尾・森永・鈴木・
本田・上田

の紀尾井ホール公演で 3 回目となりますが、毎回、オケ合わせよりも前に、教会で、口語訳聖書と大合唱・コーラルのかたちで、小規模の上演をおこなってきました。それによって、聖書の内容と曲の展開、とくにコーラルとの関連がはっきりと心のなかに落ち込み、文語体で朗読されるエヴァンゲリストの進行する本番にそなえた、よいステップとなっています。今回も、百合丘教会のお招きのおかげで、またこのような、大きなプラスを与えられましたことは、また来たる 3 月 30 日の演奏会の成功をみちびく自信となり、感謝あるのみです。

< 公演予告 >

第 108 回定期演奏会《マタイ受難曲》

3 月 30 日（土）紀尾井ホール



エヴァンゲリスト/テノール：鏡 貴之
イエス/バス：渡邊 明
ソプラノ：光野孝子 アルト：佐々木まり子
テノール：鳥海 寮 バス：藪西正道
オルガン：草間美也子
管弦楽：東京カンタータ室内管弦楽団
合唱：東京バツハ合唱団
ソプラノリビエーノ：東京バツハ児童合唱団
指揮と訳詞：大村恵美子

< 演奏時間 >

第 1 部約 70 分、第 2 部約 100 分（休憩 20 分）

< 開演・開場・終演時間 >

開場 13:00、開演 14:00、終演予定 17:30

◎全席自由席ですが、開演 1 時間前に開場しますので、余裕をもってご来場ください。

< チケットをお早目にお求めください >

前売り 4500 円 当日券 5000 円
チケット取扱い：東京バツハ合唱団事務局
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
メール：office@bachchor-tokyo.jp

後援会員・団友の皆様へのご招待状

◎1 月号月報（前々号）に同封してお送りいたしましたので、ご確認ください。万が一、不着の場合等には、ご連絡なくお申し出ください。

事務局メール・アドレスの変更

◎これまで長年使用しておりましたアドレスが不具合となり、下記に完全移行しました。

新規：office@bachchor-tokyo.jp

お手数ですが、よろしくお書き換え願います。

倍音から日本語演奏を考える

— 中村明一著『倍音』に触発されて —

下

村山 英司 (団員)

3. 日本語と倍音

西欧の石造建築の場合は非常に音が響く空間であるため、減衰率の小さい低周波数の音が有利であり、高い周波数の倍音などが先に減衰してしまう。その結果、基音を主体とした音楽が発展してきた。日本の環境は湿気が多くやわらかい土・草木・落ち葉に覆われ、住まいも吸音材に囲まれたようで響かない空間となり、西欧の場合とは全く逆に高周波の音や倍音が聞こえ易くなる。

子音同士の組合せがない日本語は音声構成が単純であり、同音語が多くなり、それを区別するために音色が複雑になる。また日本語では強調するときや特別に表情を付けるときに、非整数次倍音を使って声を濁らせ、本当に重要であるというメッセージを込めている。日本語の言語・音楽・音色を結ぶものは非整数次倍音であり、日本の伝統楽器はより言語に近く、その音に近い音色が出るように工夫されている。音高(高低アクセント)だけでなく倍音構造の違いが音色の差となり大きな役割を果たしている。

言語において母音は整数次倍音が主体である。子音の後にほぼ必ず5つの厳密な母音しか伴わない日本語は、表現の際に音色に依存する割合が高くなる。低い基音の上にある倍音を強く発声すると、低く豊かかつ歯切れの良い声になり聞き取りやすい。母音の発音処理がうまくゆかないと語音明瞭度が落ち、歌詞の意味が不明になる。多くの外国語は母音数が5つに限定されない上、母音を伴わない子音があり、さらに複合母音・中間母音・鼻母音など母音の数が多種類ある。したがって、外国語歌唱の場合は日本語よりもかなり許容範囲の広い発語表現が可能である。

日本語は言葉の論理構造と音色が強く結びついているため、倍音の少ない西洋クラシックの発声法で日本語のオペラを歌っても、言葉としてはまだしも、響きとしてその意味が伝わりにくく、その違和感是非整数次倍音が重要な要素となる日本語特有な面がある。日本人本来の倍音豊かな発声をすれば、言語・音楽・響きが一体となった複雑で豊かな表現が可能となる。例えば、古典落語の名人の世界や古い日本映画のしゃべり方が参考になりそうである。これらは決して歯切れのよい明瞭な発声ではないが、その言葉の内容は非常に聞き取りやすい。

4. 音楽とはコミュニケーション

五感の中で、「見る」と「聴く」はお互いの意思の疎通をはかる情報源として他の感覚よりも重要である。その中でも聴覚は視覚に比べ意識として認識しにくい部分が大きく、逆に無意識の深い領域に関与しているとされる。非言語性コミュニケーションの情報量はコミュニケーション全体の65~70%とされ、言語性のそれよりも大きく、真実性が高いといえる。日本人はその非言語性コミュニケーションの中でも、身振りや表情より音声、なかでも音色に依存する傾向が強いようである。

合唱するという行為も同期型コミュニケーションであり、指揮者はもちろん伴奏や周りの歌声と同期している部分、していない部分の違いを意識し、それを模倣修正するという複雑な作業をしていると考えられる。一人で歌ってみると合唱の中でできたとおりに歌えない、という経験が判りやすい例である。聴覚による非言語性コミュニケーションである音楽を演奏するにあたって、言語にこだわり基音による音組織の論理性のみに視点を狭め、音色を軽視するならば、日本語の豊かな特質を失ってしまうことになる。

5. どうすればよいのか

以上のようなやや悲観的な現実に対して日本語でバッハを歌うという行為を当てはめると、抽象的な表現であるが、バッハの音楽の枠組みの中で日本的な音色を意識して歌う、ということになる。さらにもう少し具体的に考えると幾つかのヒントが出てくる。

合唱とはいろいろな音色の声を重ね合わせる行為であり、結果として基音の音高が増幅され、それ以外は各人の音色が様々であり倍音構造が異なるため全体として平坦化する。そのために全体の響きは倍音構造が単純な西洋楽器的な音色になると考えられる。その意味では、日本語の特に母音の特性からは不利であり、ソリストの日本語はよく聞き取れるが合唱の方はどうも、と言われる原因のひとつとなる。また、ベルカント唱法で歌われた母音にはシンガーズフォルマント(第3~5フォルマント<音声スペクトル上の音圧ピークのうち低い方から3~5番目>がまとまって音圧のピークを形成する)と呼ばれる共鳴特性があり、オーケストラの楽器が大きなエネルギーを持たない2000~3000Hzの周波数帯域で歌声を響かせることができることもプロのソリストの優位性を示している。さらにいえば、合唱[とくにフーガ形式の]では同じ言葉に対して複数の音高・旋律・フレージングが重なることになり、単純にソリストと比べられても困るというのが、合唱団員の気持ちである。

波多野睦美さんというメゾソプラノの歌手がいる。ルネサンス・バロック期から現代日本歌曲まで幅広いレパートリーを持ち、透明感のある、かつちょっとくぐもったような独特の弱い高音が印象的である。舞台

では曲により、あまり口を大きく開けず歌う場合があり、その結果、陰影の濃い深みのある表現力豊かな歌を聞かせている。意識的かどうかはわからないが、倍音の豊かな音色を響かせていると感じられる。つまりやり方はあるということになる。

例えばコラルでは、極端を言えば、主旋律を歌うソプラノ以外は言葉を発せずハミングで和声を支えることに集中する、もちろんコラルの内容に対する感情は込めながら。ソプラノには負担がかかるが、日本語を伝えるという意味では、このくらいの勇気が必要はらずである。日本語のフレーズやアーティキュレーションを、可能なかぎりそろえることは必須の課題となる。

前期バロックの声楽曲やマドリガーレを得意とするソプラノ歌手の鈴木美登里さんは次のように語っている。「バッハでは語るように歌うことが大事ですね。器楽の人はアーティキュレーションによって言葉に聞こえるように演奏しています。歌詞があるから歌っていれば言葉に聞こえるかという決してそうではない。アーティキュレーションがないと言葉が生きてきません。驚いたときは息の量が増えるし、悲しいときは詰まったり……。たとえば長いという時は本当にながーいと伸ばしますよね」(文藝別冊/KAWADE 夢ムック「バッハ」2012)。バッハコレギウムジャパンの合唱が美しく聞こえるのはプロが小人数で歌っているからではなく、合唱全体の中でのバランスと役割を理解し、歌詞の隅々まで神経をめぐらし、そろえること(シンクロすること)を鍛錬しているからだと思う。

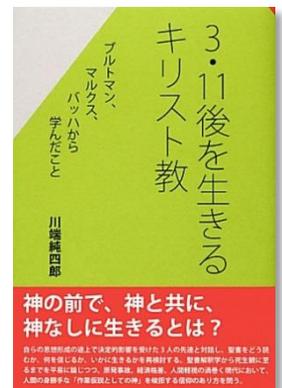
バッハの生き生きとした躍動感あふれる人間の真実への賛美の歌は、圧倒的な力でまず歌い手にせまってくる。その情熱を我々の母語を介してダイナミックに表現することこそがこの合唱団に課せられたものだろう。日本人アマチュアが原語でバッハを歌っている限り、大半は外国人の物まねであり、その情熱をたたきつけることができない。作曲家バッハの楽曲に対する思いは個々のドイツ語を介して、それを生かすリズム・メロディ・和声で表現されているはずであるが、彼自身でパロディー手法を多用したことからも知られるように、「むしろバッハは、自分の案出した特定のメロディーを実にさまざまな歌詞に適應させることができる具体的弾力性をもった作曲家だった」(W・フェリークス『バッハ—生涯と作品』杉山好訳、講談社学術文庫、277-278頁)とも考えられ、その結果、バッハの楽曲からは、総体として言語を超越した音楽的普遍性のようなものがひしひしと伝わってくる、と私には感じられる。

フェリークスの同書には《ロ短調ミサ曲》の終曲に対して以下の一文があり、これに付け加える言葉はみつからない。「深い余韻を秘め、たしかな展望に立つこの終結楽曲の調べは、バッハの神信仰と人間観の双方をひとしく反映してやまない。生きることと信じるこ

とが、二つにして一つのことと捉えられている。信じるがゆえに、生き、語り、創作し、実践に踏み出す。このような実存の深みから生まれ出た音楽は、文句なしに偉大で美しいものとして人間の魂に語りかけ、これを生かし、慰め、励ますかけがえのない役割を果たし続けるに相違ない」(同 297頁)。

バッハの楽曲に日本語を付け加えることによって、日本人が楽曲を理解し感動を共有する手助けとすることが日本語演奏の究極の目標であると私は考える。したがって、我々歌い手の中にそのメッセージを十分に理解して表現する意識が無ければまったくの絵空事である。中国の禅の高僧、達磨大師の言葉とされる「以心伝心不立文字」は「文字すなわち言語の論理性によって心を伝えるのではなく、心それ自体によって心を伝えよ」ということを意味するそうである。音それ自体のあるがままの状態を心で感じそれを伝えることができる、という可能性に目を向けてゆく必要がある、またそれには適切なやり方があると思う、ということをも一つの結論としたいと思う。

書評



川端純四郎著

『3・11後を生きるキリスト教』

— ブルトマン、マルクス、バッハから学んだこと —

小海 基 (団員、日本基督教団荻窪教会牧師)

副題「ブルトマン、マルクス、バッハから学んだこと」を見て著者の守備範囲の広さに驚く人も多いであろう。信仰的にはキリスト者、学問的にはルドルフ・ブルトマンに師事した神学者、政治的には日本共産党員(お連れ合いはかつて仙台市長選にまで立候補し、本人も名物の「仙台七夕」に「平和七夕」を出す仕掛け人、「九条の会」全国講師団のメンバーを担う市民運動家)、音楽的には教会オルガニストであるだけでなく長年「オルガンとカンタータの会」主催者としてバッハのカンタータ全曲演奏(原語上演)を続けてきた一人でもあり、日本基督教団讃美歌委員でもあるという著者の姿は仙台においては良く知られている。神学者か、市民運動家か、音楽家かというジャンル分けはもはや著者にとっては不毛な問いであろう。これまで

『J・S・バッハ 時代を超えたカントール』や5巻本の『さんびかものがたり』（いずれも日本基督教団出版局）といった大著を公けにしてきた著者にとって本書は決して分厚いものではない。しかし深刻な病と闘いながら書かれた本書はある意味で思想的な「自伝」や「遺言書」のような重い書物であり、あの「3・11」の震災以来この2年近く、自然災害については語っても原発問題についてはなぜか多くの日本の神学者たちが「自主規制」するかのように口をつぐみ沈黙を続けている中で、本当に数少ない勇気ある発言の一つでもある。

ブルトマンという神学者がどれほど画期的な業績を残した人で、「史的イエス」論争や現代の「新約聖書」学にどれだけ貢献したかはここで説明している余裕はないが、著者はここで、ブルトマンの画期的な聖書解釈学的方法である「先行的理解（前理解）」とか「非神話化」について実に分かりやすく説明する。つまり「聖書の著者たちは、すべて無自覚のうちに神話的世界像…を身につけており、それを読む私たちは、これまた無自覚のうちに科学的世界像…を背負っている」（25頁）ことを吟味すること抜きに解釈理解できないということである。しかし著者は聖書の内実が語り手・聴き手両者の「先行的理解」を押しつけてふるまい出す信仰の世界があるというバルトのブルトマン批判も正しいとする。神の働きを歴史的社会的に「かたより」をもった言語で表し、さらにそれを「翻訳」した途端に「先行的理解」の「ずれ」が生ぜざるを得ないのだけれど、しかしそれを超えて「今・ここ」で「私」の事柄として神がふるまい、語り出す世界があることを、著者は何よりバッハの例を挙げて説明している。そこは東京バッハ合唱団に関係する皆さんも大いに共感されるのではないかな。

徹頭徹尾ルター派のバッハが、カルヴァン派のケーテン公レオポルドに仕え、対抗宗教改革を代表するパレストリーナとさえ教理の違いよりも大切な共通性を音楽において告白し、《ロ短調ミサ》のような「見えざる教会における一致のためのミサ曲」（42頁）を生み出したことこそ、諸宗教共存の課題を抱える現代の私たちへの「大きな問いかけ」なのだと著者は語る。

そして「3・11」の震災と原発事故を経て、けっして「受け入れてはならない死」、「苦しむ人々を苦しめているものへの怒り」や「戦い」というものがあるし、それに口をつぐむようなキリスト教はまさに「阿片」のようなものだとも明確に語られる点には襟を正される思いがする。（新教出版社・四六判・94頁、1155円、2013年1月刊）



聖書の出典、作曲動機の探索

バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧

大村 恵美子（主宰者）

正月早々、アルジェリアでイスラム過激派による、邦人をふくむ人質騒ぎ（この稿を書いている時点では、こんなに悲惨な結末になろうとは想像もできませんでした）が起きました。いつも、今年こそ真白な気持ちで、地球平和を実現できるか、と期待をかけた途端に、それに大きなダメージを与える事件が、私たちを幻滅させてしまうのです。

かねてから危惧として語られているように、人類はどうしても文明の衝突で滅亡におちいらなければならないのでしょうか。とりわけ、世界を二分するキリスト教とイスラム教が、いよいよ露骨に向き合っており、あちこちの地域では、たとえばキリスト教国の住民というだけで、テロの対象となったりしています。植民地時代の宗主国（侵略国）と旧植民地（被侵略国）が、独立を果たした現在でも、怨恨の動機からテロや内紛を頻発させています。アルジェリアやマリでのフランス語のように、かつての宗主国のことばで争い合っているのは、じつに皮肉で痛ましい現象です。

ひるがえって日本を顧みると、開国のときに運よく占領もされず、国語も換えさせられず、「和魂洋才」と称して、キリスト教も宗教としてではなく、文化として巧妙にとり入れました。宣教師たちによって播かれた信仰の種も、教勢拡充には至らず、そのかわり社会の近代化や人権尊重への覚醒には、いちじるしく貢献したのです。これは、それ以前、政治侵略を後押ししたキリスト教会の宣教、洗脳の時代を見聞きしてきたことで、日本の指導者たちが大警戒し、うまく近代化の道へすり抜けていった結果でもあったでしょう。

現在の私たちはどうかというと、宗教を根本から見直し、すぐ“剣”と結びつく宗教、敵味方に構えて殺し合いに手を染めるような宗教を警戒し、避けるようになりました。欧米人が、日本人の大半は“無宗教”と聞くと、異端者だらけの、あるいはアナキスト集団の国のように怖がられることがあります。そうではなく、あまりにもこれまでの既成宗教が、先覚者・教祖たちの目ざしたものと逆方向に、自己保存的に組織化していったことも一因かも知れません。

私たちの合唱団は、J・S・バッハの音楽ばかりを歌ってきましたが、20年ほど以前のこと、おかしなことに、公的機関では、戦時中の国家神道による洗脳に懲りたせいか、あるいは右翼への遠慮からか、宗教的中立を、ばかの一つ覚えのように主張し、「ベートーヴェンの《第九》なら（教会と無関係だから）一般市民のイベントとして構わないけれど、バッハの《クリスマス・オラトリオ》はキリスト教だから、公の催しと

しては相応しくありません」と排斥されたこともあります。日本語でうたう歌詞を見ての反応でした。

創立 50 周年の記念行事に、ここ何年かで、バッハの 4 大合唱作品に励んできた私たちですが、心を集中させて作品を理解すれば、《ロ短調ミサ曲》も平和への祈りに集約されましたし、《クリスマス・オラトリオ》も拮抗分裂したこの地上に平和をもたらす、神の愛の顕現の物語であることを知ることができました。《マタイ》および《ヨハネ》の両受難曲も、この地球上に平和を、何としても打ち立てようとする神と人のあがきをぶつけてきたものです。バッハ音楽の支柱であるキリスト教の、本来の、ありうべき真の姿を見誤らないようにしたいものです。

そこで、私は、この連続演奏の最終回である《ヨハネ受難曲》(2014 年春) が終わったあと、約 200 曲の教会カンタータの宇宙への探索の旅に、ふたたび立ちもどる準備として、バッハが伝えたかった聖書の内容を、おっかなびっくりではなく、自分自身で主体的に検討してみようと思い、作品番号 (BWV) の第 1 から順番に、バッハの作曲動機となった、教会暦の各指定箇所テキスト (聖書章句) を読み返し、要約してみました。

ご存じのとおり、バッハの教会カンタータは、18 世紀前半のドイツ中部にあったルター派福音主義教会の礼拝音楽として作曲されたものでした。ひろくキリスト教会には**教会暦**という年間のカレンダーがあって、各祝祭日と年間の全日曜日がそこに定められ、それぞれの日の礼拝で読誦されるべき新約聖書の箇所が、使徒書簡 (パウロをはじめキリストの使徒たちから、各地の信徒たちに宛てて書かれた手紙。一部に旧約イザヤ書からも)、および**福音書**とから各教節が指定されています。牧師の説教の主題とともに、カンタータの歌詞の内容もその聖句に密接にかかわるものです。

この号から順番に 10 曲ずつ、月報の連載として、各カンタータの教会暦とその聖句の典拠を掲載してゆきますので、みなさんも、バッハのカンタータに即しつつ、聖書をひもといいてみては如何でしょうか。

この合唱団には、入団資格に制限は何もなく、無宗教だろうと何教だろうと、いっさい問うことはありません。キリスト教の神学自体からして、もう従来の宗教は、人類社会の進化の段階に応じて、宗教としての役割を終えつつあり、地下水のように人間の心の奥を流れる普遍的な信仰心が、人類の共通の希望として、その破滅を救うものになるだろう、と言い始めて久しいのです。クリスチャンでないから聖書は無関係で読まない、という狭い見方を脱して、バッハを歌うからには、歴史上にも稀に存在する典型的人間、バッハの心に迫ってみようという冷静さをもって、BWV 1 からの聖書章句を、まずは共通の研究対象として読まれることを期待します。

バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧 ①

BWV 1 《あしたに輝く たえなる星よ》(1725) Wie schön leuchtet der Morgenstern 【教会暦】 マリヤの受胎告知の祝日 (3/25 固定) (他に BWV 182) 【書簡】 イザヤ 7:10-16。見よ、おとめが身ごもって、男の子を生み、その名をインマヌエルと呼ぶ。 【福音書】 ルカ 1:26-38。天使「その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる」
BWV 2 《天より見そなわし》(1724) Ach Gott, vom Himmel sieh darein 【教会暦】 三位一体節後第 2 日曜日 (BWV 76) 【書簡】 第 1 ヨハネ 3:13-18。兄弟たち、行いをもって誠実に愛し合おう。 【福音書】 ルカ 14:16-24。大宴会を断った人と応じた人。
BWV 3 《しげき悩み 今われを襲いきて》I (1725) Ach Gott, wie manches Herzeleid I 【教会暦】 顕現節後第 2 日曜日 (BWV 13, 155) 【書簡】 ローマ 12:6-16。喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣きなさい。 【福音書】 ヨハネ 2:1-11。カナの婚礼で水がぶどう酒に変わる。
BWV 4 《キリスト 死に繋がれしが》(1707-8) Christ lag in Todesbanden 【教会暦】 復活節第 1 祝日 (BWV 31) 【書簡】 第 1 コリント 5:6-8。パン種の入っていない、純粹・真実のパンで過越祭を祝おう。 【福音書】 マルコ 16:1-8。イエス、墓の中から復活。
BWV 5 《いずこに われ 逃れゆかん》(1725) Wo soll ich fliehen hin 【教会暦】 三位一体節後第 19 日曜日 (BWV 48, 56) 【書簡】 エフェソ 4:22-28。古い生き方を捨て、新しい生活に。 【福音書】 マタイ 9:1-8。信仰により罪が赦され、病が癒される。
BWV 6 《留まれわれらと 夕闇せまり》(1725) Bleib bei uns, denn es will Abend werden 【教会暦】 復活節第 2 祝日 (BWV 66) 【書簡】 使徒 10:34-43。3 日目に復活したイエスを信じる者は、罪が赦される。 【福音書】 ルカ 24:13-35。エマオ途上の 2 人の弟子にイエスが同行する。
BWV 7 《ヨルダン河に イエス来たりて》(1724) Christ unser Herr zum Jordan kam 【教会暦】 洗礼者ヨハネの祝日 (6/24 固定) (BWV 30, 167) 【書簡】 イザヤ 40:1-5。呼びかける声がある。「荒れ野に道を備えよ」 【福音書】 ルカ 1:57-80。洗礼者ヨハネの父ザカリヤの預言、「われらの歩みを平和の道に導く」
BWV 8 《み神よ わが死はいつ》(1724) Liebster Gott, wenn werd ich sterben? 【教会暦】 三位一体節後第 16 日曜日 (BWV 27, 95, 161) 【書簡】 エフェソ 3:13-21。人びとの知識をはるかに超える神の愛を知る。 【福音書】 ルカ 7:11-17。ナインのやもめの息子を生き返らせる。
BWV 9 《救いは 臨めり》(1732-35) Es ist das Heil uns kommen her 【教会暦】 三位一体節後第 6 日曜日 (BWV 170) 【書簡】 ローマ 6:3-11。罪に死に、キリストに生きる。 【福音書】 マタイ 5:20-26。義に飢え渴く人びとは幸いである。
BWV 10 《わが魂 主をあがめ》(1724) Meine Seel erhebt den Herren 【教会暦】 マリヤのエリサベト訪問の祝日 (7/2 固定) (BWV 147) 【書簡】 イザヤ 11:1-5。エッサイの株から一つの芽が萌えいで。 【福音書】 ルカ 1:39-56。マリヤの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子(ヨハネ)が躍った。